

今年度の発掘調査現場紹介

しもおききた 下沖北遺跡 (柏崎市大字下方字下沖38-1ほか)

下沖北遺跡は、柏崎市のほぼ中央部を流れる鵜川の右岸に位置しています。調査は国道8号柏崎バイパス建設に伴うもので、今年度はバイパス法線内西側部分の6,500㎡を調査しています。

調査区西側部分からは、幅約2mの溝(堀)に囲まれた中世の居館跡と考えられる遺構が見つっています。この居館跡は出土品などから13世紀が想定され、その規模は東西100m、南北100mに及ぶものと考えられます。堀の内側では、掘立柱建物・井戸・柵・溝などの遺構が確認されています。また、堀の東側では、南北に走る道状遺構も確認されています。現在調査中の東側部分では、黒色の遺物包含層などが確認されており、水田跡などが存在する可能性が高いと考えられます。

遺物は古墳・古代・中世のものが出土していますが、出土点数では中世の遺物が大部分を占めています。中世の遺物としては、土師質土器・珠洲焼・青磁・白磁・木製品・鉄滓・羽口・銭貨・砥石・石臼などがあげられます。写真に掲載した漆椀は、繊細な文様が鮮やかに描かれた優品です。今後、9月までに全体遺構の検出を終了し、10月には現地説明会を実施する予定です。(山本 肇)



出土した中世の漆椀



中世の居館跡と考えられる遺構

みちばた 道端遺跡 (岩船郡荒川町大字南新保字道端97ほか)

道端遺跡の発掘調査は、日本海東北自動車道荒川IC建設に伴うもので、昨年からの継続調査です。調査期間は10月末までを予定しています。調査区には古墳時代(上層)と縄文時代(下層)の2種類の遺物包含層があります。ほ場整備のため、上層はかなり削平されていましたが、現在までに土師器が何点か出土しましたが、上層の調査は5月末でほぼ終了しました。その結果、調査区の東側から南側にかけて、幅15mほどの川跡が検出されました。現在、メインベルトに沿って幅1.2m、深さ1mの試掘溝を明け、下層の様子や川跡の流路などについて、さらに詳しく調べています。(内藤真一)



縄文土器出土状況

うらまわり 浦廻遺跡 (白根市大字戸頭字浦廻4392ほか)



中世の下駄出土状況

浦廻遺跡は、越後平野中央部の沖積面に位置しています。遺跡周辺では近世以降、潟湖の排水工事と干拓が大規模に行われてきました。1818年の新川掘削による鎧潟、田潟、大潟の悪水抜きや1922年の大河津分水の通水、さらに、昭和に入ってから土地画整備がなされるまでは排水不良の低湿地帯でしたが、今では排水工事等により美田を整えています。調査面積は約6,800㎡で、10月末まで調査をする予定です。6月末現在、重機による表土剥ぎが終了しました。今のところ、中世の木簡や下駄、漆器の椀など木製品が出土しています。これから始まる本格的な調査で、白根地域における中世の人々の生活の一端を解明できればと考えています。(本間克成)

しもわり 下割遺跡 (上越市大字米岡字下割1205ほか)

下割遺跡は上越市の東部、飯田川左岸に位置しています。遺跡の調査は上越三和道路建設に伴うもので、遺物包含層は上層(古代・中世の層)と下層(縄文・古墳時代の層)があります。今年度は上層部分の6,500㎡を調査します。遺跡の現状は水田で、その耕作面から約70cm掘り下げた地点で、川跡や溝などを確認しています。川跡は大きなものでは幅約3m、深さ約1mになります。遺物は須恵器や土師器、珠洲焼、銭貨などが出土していますが、調査が進むにつれ遺物量や遺構数は増加するものと期待されます。現在までの調査結果は断片的ですが、今後上越地方の歴史の一端を解明できるよう、調査に努めたいと考えています。(山崎忠良)



発掘調査風景

平成14年度発掘調査・整理作業一覧

〔発掘調査〕

遺跡名	所在地	関連事業	主な時代(時期)	種別
道端遺跡	岩船郡荒川町大字南新保字道端97ほか	日本海東北自動車道	縄文・古墳	集落跡
浦廻遺跡	白根市大字戸頭字浦廻4392ほか	国道8号白根バイパス	中世	集落跡
下沖北遺跡	柏崎市大字下方字下沖38-1ほか	国道8号柏崎バイパス	古代・中世	集落跡
下割遺跡	上越市大字米岡字下割1205ほか	上越三和道路	縄文・古墳・古代・中世	集落跡

〔整理作業〕

遺跡名	所在地	関連事業	主な時代(時期)	種別
青田遺跡	北蒲原郡加治川村大字金塚字青田	日本海東北自動車道	縄文	集落跡
沖ノ羽C遺跡	新津市大字七日町字沖ノ羽	磐越自動車道	古墳・古代・中世	集落跡
関川谷内遺跡	中頸城郡妙高高原町大字関川字谷内	上信越自動車道	縄文・古代	集落跡
円山遺跡	北蒲原郡安田町大字六野瀬字円山	北陸自動車道	旧石器・縄文	集落跡
北野遺跡	東蒲原郡上川村大字九島字長木	磐越自動車道	縄文	集落跡
上浦遺跡	新津市大字福島字上浦	磐越自動車道	古墳・古代・中世	集落跡
赤坂山中世窯跡	北蒲原郡安田町大字臭水字赤坂山	磐越自動車道	中世	窯跡
堀向瓦窯跡	上越市大字黒田字堀向	上信越自動車道	縄文・近世	窯跡

〔確認調査〕

日本海東北自動車道関係では、中条IC～村上ICの間で試掘調査を行ないます。

国道関係では、柏崎バイパス、上越三和道路など計8路線で試掘調査を行ないます。

北陸新幹線関係では、上越市、糸魚川市、板倉町、青海町で試掘調査を行ないます。

- 朝日分室を開設しました -

当事業団では、平成12年度に実施した「整理計画検討委員会」報告に基く整理体制の拡充に対応する目的で、旧朝日村奥三面遺跡調査室を借り受け、平成14年4月1日付けで朝日分室を開設しました。これにより作業スペースや整理作業員が確保され、今後、より効率的で迅速な整理作業・報告書刊行が期待されます。

朝日分室は旧三面中学校校舎(木造2階建)の一部を利用したもので、施設概要は延床面積が約1,100㎡、整理作業スペース約400㎡(8室)、遺物収蔵スペース約370㎡、休憩室・トイレ・廊下等が約330㎡です。今年度は職員2名と嘱託員(専門)2名、嘱託員(一般)15名が常駐し、高速道建設に伴い発掘調査した上浦遺跡・赤坂山中世窯跡・北野遺跡(磐越自動車道)、堀向瓦窯跡(上信越自動車道)の整理作業を実施しています。来年度以降も毎年3～4遺跡の整理を行っていく予定です。

建物は少々古い(昭和22年建築)ですが、木造校舎で学んだ経験のある方はなつかしさを感じることができると思います。周辺には清流三面川をはじめとする豊かな自然が残り、奥三面遺跡群から出土した遺物や古民具を展示する朝日村奥三面歴史館、三面ダムなどと併せて、自然と歴史を学ぶ絶好のフィールドです。整理作業や遺物の見学も可能ですので、気軽にお立ち寄りください。

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団 朝日分室

住所: 新潟県岩船郡朝日村大字中新保56番地

TEL: 0254-72-1023 FAX: 0254-72-1034



掲げられた朝日分室の看板

平成14年度の普及・啓発事業

1 現地説明会

今年度は県内の4ヶ所で遺跡発掘調査を実施していますが、それらの成果をいち早く公開するために現地説明会を実施する予定です。現在の所、現地説明会の実施が確定した遺跡はありませんが、実施する遺跡や期日が決まり次第、当事業団のホームページ（アドレスは本ページに記載）でお知らせします。遺跡や発掘調査に関心のある方は是非、足をお運び下さい。



青田遺跡での現地説明会

2 発掘調査報告会

平成5年度から毎年実施している発掘調査報告会も今年度で

10回目を迎えます。昨年度は事業団設立10周年の節目の年に当たったことから、従来の発掘調査報告会に加え青田遺跡の公開シンポジウムを実施したところ、2日間で2,000名を超える方々にお出でいただきました。今年度は下記の期日・会場で実施いたします。スライドを利用した報告に加え、遺物展示も行いますので、ご来場をお待ちしています。

期日：平成15年3月2日(日) 会場：新潟ユニゾンプラザ



発掘調査報告会での遺物展示

3 各種刊行物の発行

当事業団の活動内容や研究内容を紹介するため、『埋文にいがた』（年4回発行）、『年報』（年1回）、『研究紀要』（隔年で発行）などを発行しています。広報誌である『埋文にいがた』

は県内の全ての学校や市町村教育委員会、図書館などに配布しています。また、個人で購読を希望される方は郵送料のみでお送りいたしますので、資料室の『埋文にいがた係』までご連絡下さい。

4 ホームページの開示

平成12年8月から事業団独自のホームページ（<http://www1.ocn.ne.jp/~n-maibun>）を開示しています。内容は、What is 埋文事業団、発掘現場情報、体験学習案内、速報掲示板などから構成されています。皆さんも是非一度アクセスしてみてください。

5 見学者の受け入れ

昨年度の年間入館者数は、6,400名余りで、その内の半数が校外学習で利用した小・中学校の皆さんです。校外学習の受け入れについては、次ページで詳しく説明しています。館内は展示室をはじめ、速報コーナー、完形土器室、作業の様子などの見学が可能です。開館時間は、年末年始を除く毎日9時～17時までとなっています。料金は無料ですので、お気軽にお立ち寄り下さい。



速報コーナーの展示

6 展示室の管理・運営

展示は、展示室とエントランスホールのコーナーの2ヶ所で行っています。展示室は大きく通史と注目される遺物の二つから構成されています。エントランスホールのコーナーは、最新の成果を展示する速報コーナーの意味合いをもっています。展示室は9月に展示替えを行う予定ですので、ご期待下さい。

埋蔵文化財センターでの校外学習について

1 基本方針

考古資料の効果的な活用方法の工夫や体験実習メニューの開発を通し、先生方並びに児童・生徒の皆さんが積極的に学習できる環境を提供し、センターを生きた歴史教室の場として利用していただく。

2 実施までの流れ

校外学習の申し込み（電話等で希望日時並びに構想の概要を伝達する。）

センターでの事前打合せ（実施日の2週間～10日前を目途に実施する。）

校外学習依頼書・学習計画書の送付（実施日の1週間前到着を目途とする。）

校外学習の実施（当日の進行・運営等は学校側が中心になって行う。）

3 具体的な利用方法

a 展示室・速報コーナーの利用

自由見学や課題学習等に利用できますし、事業団職員による説明つきの見学も可能です。

b 研修室の利用

ここでは引率の先生方の構想に沿った授業をすることもできますし、体験実習の場としても利用できます。

c 体験実習の利用

火おこし体験...センターにある用具を使って、2種類の火おこしが体験できます。

石器体験...黒曜石で作った石器を使い、野菜・肉・魚等を切ってみることができます。

煮炊き体験...模造縄文土器と薪を使って、持参したジャガイモ等をゆでて試食することができます。

文様つけ体験...粘土板と土器に文様を施す道具を使って、縄文土器の文様つけが体験できます。

土器作り体験...実習時間が3時間程かかりますが、縄文土器作りを体験することが可能です。

4 他施設との連携

センターのある新津市金津丘陵には、様々な公共施設や八幡山古墳、弥生時代の復元住居などがあります。センターでは県立植物園・新津市美術館・石油の世界館と連携し、複数施設を組み合わせた校外学習を積極的に進めています。

5 連絡先について

校外学習に関する各種の問い合わせは、下記宛てまでお願いいたします。

（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団 資料担当普及班

T E L 0250 - 25 - 3981

F A X 0250 - 25 - 3986



土器での煮炊き



火おこしに挑戦



真剣に土器作り



笑顔で試食

連載企画・にいがたの文字資料から

第1回 - 木簡 -

新潟県に関する文字の書かれた資料を取り上げ、4回シリーズで連載します。国宝の火焰型土器に代表されるように、縄文時代が広く知られる新潟県ですが、文字が書かれた出土品でも興味深いものが発見されています。紙以外のいろいろな材質に記された文字の中で、今回は木札に記された文字、「木簡」を取り上げます。

今のところ、木に文字を記すようになったのは約1,350年前（西暦650年頃）とされています。日本人が記した最古の漢字は、約1,500年前（西暦450年頃）とされ木簡が用いられるまでの約200年間は鉄剣のような金属か石碑のような石に文字を彫り込んでいました。これを金石文といいます。刻む文字として始まった文字は、墨・筆・紙が伝来し記す文字へ変化してゆきます。

木簡が使われた時代は、紙漉は高度な技術で、紙そのものが貴重な時代でした。重要な内容は紙に書きますが、その他は木の特徴を活かして代用したのが木簡です。木は紙より丈夫で、書いた文字を削り取れば新たに文字を書き再利用できるなどの利点がありました。県内では和島村八幡林遺跡や笹神村発久遺跡などで多数の木簡が見つっていますが、今回は越後国から送られた荷物に付けられ、さながら宅急便の送り状のように、荷札として都まで行った荷札木簡を取り上げてみたいと思います。

写真 は奈良の都、平城京の道路の溝から出土しました。「沼足戸米」と記された木簡と一緒に出土し、米などの租税に沼垂郡で付けられ、着いた都で不要となって捨てられたのでしょう。写真 のように都では各地から送られた荷札木簡が出土します。今まで和島村下ノ西遺跡から「越後国高志郡越志高高志高…」など荷札に記す文字を練習した木簡は出土していましたが、実際に送られたものは見つかっていませんでした。写真は越後国から送られた木簡の最初の発見例となり、他に佐渡国からの最初の発見例も同じ溝から見つかっています。淳足柵設置から100年足らずで、越佐は他国と同様に租税を負担していたのでしょう。

木簡の形状から分かることもあります。写真 の木簡は上端を山型に尖らせているのが分かります。このような形の木簡は、今のところ越前など北陸方面から都に送られた木簡だけに見られるとされており、北陸の地域的特色を表わしている可能性があります。このように形から時期や地域性、ときとして文字がなくとも木簡の使われ方がある程度判断できる場合があります。

写真 の木簡は、沼垂郡にとっても重要な資料です。今まで「沼垂郡」を記した最古の資料は、967年成立の延喜式によるものでした。それが、「沼足郡」の木簡が出土し735（天平七）年頃捨てられたと分ったことで、沼垂郡に関する最古の資料が約200年も遡ったのです。当然、このときまでに沼垂郡が成立していたことも判明しました。

このように県外から出土する新たな文字資料によって、新しい歴史の一面が見出されることもあるのです。

なお、都のトイレ遺構からは今のトイレトーパーにあたるちゅうぎ籌木という木が出土します。その中には細く割られた木簡が含まれていることもあります。木簡の中には、最後まで重要な役割を果たして捨てられるものもありました。（田中一穂）



写真提供 奈良文化財研究所

越後国沼足郡深江×

写真



写真提供 奈良文化財研究所

長屋親王宮鮑大贄十編

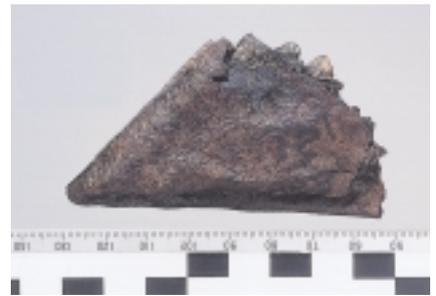
写真

埋文コラム「発掘から見てきた文房具の歴史」前編

古代から、紙・墨・筆・硯、これら四点は「文房四宝」と呼ばれ、筆記用具として活用されていました。その他、硯に水を注ぐ水滴、貴重であった紙の代わりに用いた木札、木札に墨で書いた文字を削り取る消しゴムの役目をした小刀、長さを測る用具の物差しなど、様々な文房具がありました。今回と次回の2回にわたり、新潟の遺跡から出土した遺物を中心に、発掘から見てきた文房具の歴史を紹介します。

紙…漆紙文書

紙文書は、通常長い間地中に埋没していると腐って消滅してしまいます。ところが、文字の書かれた紙が、漆の付着した状態で遺跡から出土することがあり、これを「漆紙文書」とよんでいます。漆紙文書は、もともと漆を用いた作業時に、漆液の硬化を防ぐため“フタ紙”として漆液の表面に密着させて使用していました。大半が不要になった文書を再利用していたようです。“フタ紙”として利用した後に、折り畳んで破棄したものが、付着した漆の強い保存力によって遺存したと考えられています。古代・中世における貴重な文字資料のひとつです。上越市海道遺跡（平安・中世）からは1/8に折り畳んだ状態の漆紙が検出され、現在文字の有無を分析中です。



漆紙文書（海道遺跡）

硯

硯は、時代や時期によって特徴があり、石製、陶製、木製など、その材質や形も多様性に富んでいます。また、土器の皿や蓋を硯として再利用する転用硯とよばれるものもありました。上越市滝寺古窯跡群は、平安時代に須恵器を焼いた窯の跡ですが、ここから水鳥の装飾がついた円面硯が出土しています。写真で見ると、台が付いた陶製の丸い硯で、外周に墨液を溜める海をめぐらせ、その内側に墨を磨る陸を設けています。同じ上越市の木田遺跡（平安・中世・近世）では、石硯が5点と、墨痕がわずかに残る須恵器杯の転用硯が1点出土しています。また、水原町堀越館跡（中世）では、石硯が12点出土しています。一般的な出土例では、墨を磨る面が方形のものが多数を占めますが、この遺跡では楕円形の硯が6点も出土しています。使い手がこの種の硯を好み、意識して集めたり作らせた可能性も考えられます。写真の装飾硯も硯面が楕円形をしており、このような硯は類例も少なく領主が使用したのと考えられます。装飾は、水紋に雲と龍を彫りこんだ精緻なもので、箱に入れて大切に使用したのと思われる。陸部の中央部分は磨り減って窪んでおり、愛用した様子がうかがえます。

（今野明子）



円面硯（滝寺古窯跡群）



石硯と転用硯（木田遺跡）
上段・右端が転用硯



装飾硯（堀越館跡）

引用・参考文献

- 「考古学雑誌 第70巻 第4号 日本石硯考 - 出土品を中心として - 水野和雄」日本考古学会 1985
 「正倉院宝物と平安時代 - 和風化への道」淡交社 米田雄介 2000
 「多賀城漆紙文書」宮城県多賀城跡調査研究所資料 宮城県多賀城跡調査研究所 1979

県内の遺跡・遺物37

むろ や どうくつ
室谷洞窟出土品（平成12年 国指定）

遺跡所在地：東蒲原郡上川村大字神谷字室谷ほか

室谷洞窟は、日本海に流れ込む阿賀野川の支流である室谷川の上流に位置し、河川の側方侵蝕により形成された洞窟に営まれた遺跡です。調査は昭和35年～37年にかけて、長岡市立科学博物館によって実施されました。洞窟は、入口幅約7m、高さ約3m、奥行き約8mで、調査面積は約50㎡でした。

洞窟内では、15層に及ぶ遺物包含層が確認され、出土遺物は下層出土の縄文時代草創期に属するものと、上層出土の縄文時代早期～前期に属するものに大別されます。出土遺物の総数は約2万点に上りますが、重要文化財に指定されたものは、その中の所属時期、器種などが明確な資料1,402点です。遺物の中でも、下層から出土した「室谷下層式」と呼ばれる土器群は、押圧縄文や回転縄文などを文様とするものを主体としています。出土点数は

5,000点以上に上り、全体が復元できた完形土器が5点含まれています（写真参照）。この時期の完形土器は数が少なく、出土点数も破格の多さで、全国的に見ても第一級の資料といえます。また、上層から出土した骨角貝製品は、その多くが欠損しており、器種は明確ではないものの刺突具や骨針の類を主としています（写真参照）。こうした室谷洞窟の出土品は、質量ともにこの時期屈指の内容を持ち、縄文時代の始まりを理解するうえで欠くことのできない資料といえます。



上層から出土した骨角貝製品
 （写真提供 長岡市立科学博物館）



室谷下層式土器（写真提供 長岡市立科学博物館）

埋文にいがたNo. 39

発行（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団

〒956-0845 新津市金津93番地1 e-mail:maibun@coral.ocn.ne.jp

TEL (0250) 25-3981 FAX (0250) 25-3986

印刷 新高速印刷（株）